

「人々のことば」と「開発のことば」をつなぐ試み -- 「開発援助実践の人類学」に向けて（特集 開発援助と人類学）

著者	佐藤 峰
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	151
ページ	20-23
発行年	2008-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005025

「人々のことば」と「開発のことば」をつなぐ試み——「開発援助実践の人類学」に向けて

佐藤 峰

●「人々の壁」

国際協力の分野において「『発展途上国の人々』に対し外部者（私たち）に何ができる（できない）か」について、悩み無く働いている人をあまり知らない。悩み無く開発プロジェクトなどの現場に近づくほど深くなる。目の前にいる人々が暮らす社会には問題があり、その犠牲になっている人々は社会的弱者だと思える一方で、プロジェクトには期限がありその社会に一生関われるわけでもないからだ。

このような状況に対し、「社会変革はそれぞれの地域が持つ自然な速さで起こるべき」という立場を取れば、不介入が答えなのだろう。しかしそうであれば、国際開発という名の下で様々なプロジェクトを展開する意味も無いであろう。実際のところ、国際協力、特に現場に携わる人々（開発ワーカー）の多くは、「諸々の制限はあるがその中で人々の見解を最大限に尊重できる方法で、途上国の置かれた状況に対して何かをしたい」という思いを抱えながら働いているはずだ。

従って開発ワーカーは大抵の場合、（参加型開発を含め）プロジェクト目標などをアジェンダ化した「開発のことば」を平易なものに直して、目の前の人々に対して対話を試みる。しかし以下のような壁にぶつかることが多々ある。発信者としては、かなり工夫して言い換えてもこちらが伝えようとする「開発のことば」が通じないという壁にぶつかる。技術協力研修の場面で、「なんとなく通じているようだが、どうも先方は腑に落ちていないのでは」という経験をした方は多いだろう。さらには「問題の犠牲になっていると思われる当事者にはそういう意識がないことが、どうも納得が行かない」という受信者としての壁にもぶつかる。「それは問題ではない」という「人々のことば」は、個人の領域を超えたその土地にある様々な社会条件に影響されていると感じるからである。例えば、ここにひとつの大きな「ことばの壁」があり、こちらからあちらへのことばも、あちらからこちらへのことばも通じないという状況である。

そこで本稿では以下の事例を用い、「開

発のことば」は想像以上に特異な条件下でしか成り立たないものではないか？」と「『人々のことば』は自由に語られているか？」の二つの問いを深めていく。それにより「どうすればことばは通じるのか？」という問いに取り組んでいく。

●ニカラグアでの事例

二〇〇二年から二年間ニカラグアにおいて、「思春期リプロダクティブヘルス教育」（以下、思春期リプロ教育）にJICA専門家として関わった。当時一九歳以下の少女の四六%が出産を経験していたので（参考文献①）、そんな「一〇代の危険な・望まない妊娠」を防ぐためだ。

リプロダクティブヘルスとは「生殖と性に関する健康」という意味であるが、その達成のためには、性について自己決定できることが必要となる。しかしそのためには、自己決定そのものができなければならない。従って思春期リプロ教育では「自尊心があり、性のみならず人生に計画を持って、自己決定していける青少年少女を育てること」が目標とされ、性教育に加え幅広い情操教



開発援助と人類学

育が行われる。

しかし、実際に妊娠している、農村や都市スラムに住む少女たちから話を聞くと、大抵「一〇代で妊娠するのは問題ではない」と答える。しばらく話をすると「でも友達には勧めない」とも言う。彼女たちは妊娠によって妊娠の仕組みを知ったようであり、しかも相手の男性が「責任を取る」ケースは少ない。少女たちは元々社会の下層階層に属し、妊娠・出産により、さらに社会から取り残されうる社会的弱者といえよう。しかし彼女たちに「自尊心」などといった話が始まらない。

そこで以下では、「開発のことば」である、「自尊心があり、性のみならず人生に計画を持って、自己決定していける青少年少女を育てること」の特異性と、「人々のことば」である「一〇代で妊娠するのは普通。でも友達には勧めない」の政治性を分析し、そこから「通じることば」を作り出す試みを行いたい。

●「開発のことば」の特異性を認識する

「どういうことばなら通じるか」を考えるためには、まず「開発のことば」の特異性を認識する必要がある。ここでは「自尊心があり、性のみならず人生に計画を持って、自己決定する」について考えたい。

まず自尊心（スペイン語で *Auto-estima*）であるが、これは自己と他者の

領域がある程度固まっていることが前提でしか成り立たないと思われる。主語・目的語を立てないと話せない英語などの言語と、そうでない言語とでは、自己と他者の仕切りの感覚も異なるだろう。加えて自分を尊重することをわざわざ単語にするという習慣も、よく考えると特殊であろう。

次に「人生に計画を持つ」であるが、これはしばしば個人の職業目標ということに理解されていた。しかし大家族の中で暮らせば、個人の計画を持つことはなかなか難しいだろう。また厳しい階層社会であるニカラグアでは、目標に向かい努力することとがしばしば何の結果ももたらさない。仮に目標を達成し自分の望む職業に就けたとして、そこからの「性についての自己決定の成就」もさほど簡単でない。例えば子どもを産み育てることを自己決定しても、就業機会が元々少なく、十分な産休・育児制度がある仕事はさらに少ないからである。

このように「開発のことば」は、実は様々な特異な条件下においてしか成り立たない。そしてそのことばがどんなに言い直されても、それが「開発の文脈」に基づいたものである限り、先方はなかなか腑に落ちないということだ。

●「人々のことば」の政治性を分析する

次に「一〇代の妊娠は普通で問題でない。

でも友達には勧めない」という「人々（ここでは妊娠している少女たち）」のことば」の奥に何がありうるかについて考えたい。「普通」の意味を読解すると「自分の母も、祖母もそうだし、近所の子もそうだし、相場観として普通」問題でない「ひとつの型だ」という解釈ができよう。しかし友達に勧めない型でもある。これは何故か。

ニカラグアはキリスト教（旧教）が国教であり、それが法体制にも影響する。従って妊娠中絶は違法である。お金があれば選択肢もあるが、そうでなければ農薬を飲むなど危険な方法以外に選択肢がない。つまり「法的に妊娠を否定しても選択肢が無いので否定しない」が、このことばを生み出す一つの文脈でありうる。

宗教観に結びついた「妊婦としてあるべき態度」が、彼女たちの言行に影響するという側面もある。私が着任中に一二歳の少女がコスタリカでレイプをされ妊娠したが、本人は出産を「望んだ」という事件があった。この自己決定の背景には「他者が期待するだろう望ましい妊婦像」の呪縛が相当にあったと推測される。例は極端かもしれないが、似たような「望んだ」妊娠と出産例は無数にある。そう考えると「友達には勧めない」の一言は、土地にある価値観（型）と彼女たちの実際の経験（現実）のギャップが生んだ警句とも取れる。

もしくは、少女たちは自分の置かれている社会的条件から、妊娠や出産というシナ

リオ以外に何も用意されていないことを見切っているのかもしれない。それを「普通」と表現し、同じものを友人に特に勧めないので、上記の発言をしているとも考えられる。

あるいは「身体は自然に属するので、そこに起こることは、日照りや干害のように、人知を超えた（神の意図なので）仕方が無い」という無意識の認識からの発言かもしれない。

何れにせよ分かるのは、「人々のことば」の奥には、それを語らせる複数の政治的な文脈が潜んでいるということだ（参考文献②）。従って、社会的弱者と言っている少女たちの発言を、単なる自己決定による自由な発言と理解するのは妥当ではなからう。

●「どんなことばなら『通じる』だろうか？」

「開発のことば」は人々の現実から離れ、「人々のことば」も絶対でない状況で、まだそこに対話がありうるならば、それはどんなことばによるものであろうか。

私たちの日常での会話で考えてみると、ピンとくる・合点がいくと思える時には、大抵文脈の共有があると思う。その文脈とは似た社会条件や、馴染み深い例や単語や、起承転結というロジックなど色々であろう。それは平面の紙に落とせることば（テキスト）の奥には、紙に落とせない立体の文脈（コンテキスト）ことばと共にあるもの（

が付随しており、ことばと文脈はセットでないと理解されないことを意味する（参考文献③）。そうであれば、「開発のことばと文脈」は置いておいて、「人々のことばと文脈」に潜り、「開発のことば」のもつメッセージに一番近いと思われるものを探し、そこから作文して通じる会話を作り出すことは可能であろう。これを「自尊心があり、性のみならず人生に計画を持って、自己決定する」の例に戻って考えたい。

まず自尊心だが、自分を大切に思えと言われても、ニカラグアの少年少女にとっては難しいようだった。しかし他者を尊重した結果、自己が尊重されるということであればどうであろう。「私たちは自身の欲するものを、他者に与えることでしか手に入れることができない」とはレヴィイ・ストロースの名言だが、そんな自尊心もありうる。例えば来客を厚くもてなすことや弱い立場にある者に施しをすることは、多くのニカラグアの人々にとって日常的行為である。そのような行為は、「他者を思いやれる」自尊心のある自己「無しには成立しないはずだ。これを話の枕に「他人を思いやるといふ自尊心」について話した方が、まず自分を可愛がる自尊心を持つ」という方法よりも通じるだろう。さらにこれを応用して「男（女）らしさを示すために性交を無理強いしないことを『他者に与える』ことが高い自尊心によるものだ」という話をすることもできよう。

次に性の計画が伝統的にどうなされていたかについて考えてみたい。中南米には広く“Quinceaño”という一五歳女子の成人式がある。現在では単にお金がかかるパーティーになっているが、元来「それ以降は認められた相手とは、結婚（性交）してもよい」という仕切りの儀式であった。これは家父長的な性行動の管理という抑圧の性質を持つ儀式である。しかし、結果として母体を守る役割を担っていたという側面があることも無視できない。ニカラグアの少女少女に「一〇代の危険な妊娠」と言っても分かりにくい。そこでこの儀式を例に「昔の人も一五歳以下の妊娠は危険なものとして避けていた」ことを伝えた方がずっと理解されやすいだろう。ただしその際に「それ以降に性交をする必要もないし、親が決めた相手以外とは性交渉できないこともない」ことも強調すべきではある。

最後に性における自己決定に関連して、性交渉における権力関係について考えてみたい。性交渉時の男性の優位性は事実として多くの人に認識されているはずである。しかし、権力関係というのは常に揺らぐことができないものでもなからう。ニカラグアには、中米最古の一六世紀成立といわれる、現在も人々に親しまれる“Güegüense”という口承劇がある。劇のクライマックスは“Macho Ratón”という半人半獣が、占領者であるスペイン人をコミカルな踊りと言行で煙に巻くというシー



開発援助と人類学

ンである。この劇が植民地支配下より伝えられてきたことは、人々が「権力関係は必ずしも絶対ではない」ことを「経験から知っていた・望むことができた」ということではないだろうか。そうであれば、この物語を、性交渉や家族との関係などの「動かせない」と思える権力構造には風穴がある「ことへの気づきにつなげるのではないか。

●終わりに―開発援助実践の人類学に向けて

上記のアプローチを一言で言えば「人々のことばと文脈で開発のことばを温故知新的に翻訳することで、話を通じやすい状況を作る」ということだろう。最後にこのアプローチの限界と可能性について考察したい。

まず両義性について。上記の妊娠している少女の例から分かるように、「人々のことば」は権力構造と無関係でなくそれ自体に暴力性がある。つまりそれを用いるということは、メッセージが伝わりやすくなることでもあるが、マイナス要素のある価値観も付随してくる可能性がある。例えば「Quinceaño」だが、大人が女子の性行動を管理することの正当化という側面があることは否めない。従ってそのような価値観が持つ暴力性を和らげるような工夫が必要となる。加えて、どこまでが「人々のことば」であるかも難しい問題である。上記の例では「Güegüense」以外は植民地支配がもた

らした風習であるといえるからだ。さらに少女たちの例にもあるように、「人々のことば」は厳密には誰のことばかという課題も残る。「人々のことば」とその土地にある価値観は常にイコールでは結べないからだ。また、ことばが通じたところで、それが行動変容・社会変革に自動的に繋がるかといえ、それは保証できない。

このような限界を抱えるアプローチであるが、同時に様々な可能性も内包すると思う。まず「相手のことばの奥に潜り、そこからことばを拾ってくる」ということは、相手の文脈を通じて開発のことばを振り返るということである。そうすると「開発のことば」が人々の生活の尺度に合わないことが理解される。加えて、「開発のことばが、実は私たちのことばではない」という気づきもある。例えば上記の思春期プロのことばは、日本で思春期を過ごした私にとってもピンと来ないものである。これはこの例のみならず、様々な開発の場所で日本人が持つ感想であると予想する。このような違和感は、生活者（当事者）としての感性から国際協力の実践を考えるために、重要であろうと考える。私たちは結局のところ、他者の生活に関わっているからだ。

本稿では、ニカラグアの伝統的な儀礼や習慣などから、思春期プロ教育の「開発のことば」を翻訳して伝える例を示した。しかし「人々のことばとその文脈」にはそれ以外にも、独特の語呂・節回し・ロジッ

ク・特に人々の琴線に触れる例など多々ある。従って、様々な開発援助の実践の中で汎用性あるアプローチとして取り入れることが可能であると考ええる。

（開発）人類学において、開発の現場にどう関わるかという統一見解は無く、「あくまでも観察者としての立場を取るべき」との意見もある。しかし今日の「発展途上国」における貧困・格差の状況を鑑み、そこに積極的に関わるといふスタンスがあってもよいと考える。従って上記のような「人々のことば」と「開発のことば」をつなぐ「第三のことば」を作り出すことは、そのようなスタンスを取る開発人類学者にできるひとつの大きな貢献であると考え、これを「開発援助実践の人類学」のひとつの形として提示したい。

（さとう みね／東京大学大学院新領域創成科学研究科非常勤講師）

《参考文献》

- ① INEC, Encuesta Nicaraguense de demografía y Salud, 2002.
- ② Foucault, Michel, *Power/Knowledge: Selected Interviews and Other Writings 1972-1977*, edited by Colin Gordon, New York: Pantheon Books, 1980.
- ③ ロラン・バルト『テキストの快楽』みすず書房、一九七七年。